

ヨコハマトリエンナーレ 2011 「キッズ・アートガイド 2011」 レポート

京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター
リサーチアシスタント 渡川 智子

本プログラムについて

「キッズ・アートガイド 2011」は、子どもたちに自らの意志で作品と関わり、作品について自分の言葉で語る力を身につけてもらうとともに、コミュニケーションを通して作品を鑑賞する楽しさや気づきを、ガイドを務める子どもたち、そして鑑賞者（お客さん）に味わってもらうことを目的としています。

トリエンナーレの教育プログラムとして3回目の実施となる今回は、より体系的なプログラムづくりを目指して、ACOP（アート・コミュニケーションプロジェクト）の鑑賞メソッドを導入。プログラム全体が子ども達をトレーニングするための「事前ワークショップ」と展覧会での「キッズ・ガイド実践」の2段階構成となっており、本センター伊達・渡川は、キッズ・ガイドが開始されるまで4回行われた「事前ワークショップ」の企画・運営を担当しました。

事前ワークショップ

自分の意志で作品に関わり、作品について自分の言葉で語る力、お客さんとコミュニケーションを通して作品を鑑賞する力をトレーニングするためのワークショップ（以下WS）を企画、実施しました。これらのWSでは、「みる」「考える」「話す」「聞く」というACOPの基本要素を意識的に活用していきます。

第1回 モネパズル「作品をじっくり見てみよう！」

2011年6月12日（日）



第2回 手紙WS「ことばでつたえてみよう！」

2011年6月26日（日）



第3回 応答WS「話を聞いてみよう！発表しよう！」

2011年7月24日（日）



第4回 本番シミュレーション「作品をみて話あってみよう！」

2011年8月8日（日）



本番の流れ

4回のワークショップを終えた後、8月10日からはヨコハマトリエンナーレ会場の横浜美術館と日本郵船海岸通倉庫（BankART Studio NYK）にて、お客さんたちへのガイドが開始されました。（会期中、合計8日間のガイドが行われました。）

各回、午前と午後に1回ずつ、各約1時間、ツアー形式で10点ほどの作品ガイドを行います。子どもたちは1つの作品につき1人～3人がひと組になり、その作品をみた感想や疑問に思う事など、「自分の言葉」でガイドしていきます。お客さんへの質問など、その場での会話が積極的に取り入れられました。子どもたちの素直な見方や発見に促され、ガイドを聞いている大人たちが作品をじっくり見直す姿が何度も見られました。



各回終了後は反省会を行い、「良かったところ」と「悪かったところ」をメモに書き出し、全員で共有しました。

最終日（10月30日）には、おつかれさま会を開催。ヨコトリ総合ディレクターの逢坂恵理子さん（横浜美術館館長）から、子どもたち一人一人に修了証が手渡されました。

プログラムを終えて

5ヶ月間のプログラムを経て、一段とたくましくなった子ども達。プログラム終了後の子ども達からは、「これからも色々な作品をみて、考えていきたい」、「作品には色々な意味があることを知って面白かった」、「人前で話すのが前よりもできるようになった」、「お客さんに楽しかったと言われたのがすごく嬉しかった」などの感想が聞け、作品をじっくり見て考え、自分の言葉で話していくことで、新たな発見や気づきが生まれたようでした。このプログラムでの経験が、参加したお客さま、そして子ども達の今後へ、それぞれの形でつながってゆくことを願います。